

【新収書籍・データベースの紹介】

■中国社会科学院近代史研究所編（虞和平主編）『近代史研究所蔵清代名人稿本抄本』（第一輯），全145冊，北京：大象出版社，2011年。

中国社会科学院近代史研究所（現在は中国社会科学院・中国歴史研究院・近代史研究所）は、現在進行中の「国家清史纂修」プロジェクトの中の「文献叢刊」の一環として、2006年に所内所蔵の現資料を影印出版する計画を立ち上げた。その結果、刊行されたのが本シリーズであり、全三輯457冊で50数名の個人文書（檔案）の全貌を公開するという大規模な史料集となった。第一輯には、次の清末政治家26名の文書を収録する。

鄧廷楨，晏端書，喬松年，閻敬銘，秋墅，張樹声，岑毓英，翁同龢，陳宝箴，孫毓汶，吳大澂，榮祿，奕劻，長順，奕譞，張曾敳，唐景崇，陸忠琦，奕謨，綽哈布，陳璧，梁敦彥，易順鼎，梁鼎芬，李盛鐸，端方

文書の内容はほぼ全てが初公開であり、奏摺・咨文・布告・電報・書簡・手札・詩文・筆記・日記・家譜・帳簿など多種多様である。書簡は檔案主と関係や往来のあった人物からのも多く、清末史を研究する上で基本資料となる。とくに分量の多いのが、閻敬銘(2万余頁)，孫毓汶(1万7千頁)，張曾敳(1万6千頁)で、その史料的価値は高い。(ただし、手書きの稿本・抄本なので、判読・翻字にはそれなりの経験と技量が要求される。)

なお、未購入の第二輯は張之洞一人の個人文書を収録し、全172冊が2012年に刊行された。本シリーズの目玉とも言える部分で、その史料的価値ゆえに長らく公刊が待たれていたものである。清末政治の枢機に関与した大官の文書としては、同じ「国家清史纂修」の「文献叢刊」シリーズで出された『張之洞全集』（趙德馨主編，武漢：武漢出版社，2018年）を遥かに超える規模である。また、第三輯（全140冊）は以下の23人の個人文書を収録する。

龔景瀚，鉄保，立山，繆梓，端華，庫克吉泰，曾國藩，俞廉三，曾國荃，楊秉璋，程文炳，勞乃宣，樊增祥，盛昱，顧肇新，瑞洵，袁昶，袁世凱，繆荃孫，桂清，韓仲荊，錫良

予算状況にもよるが、第二，三輯も現代中国研究班で継続購入の予定である。

（村田雄二郎）

■「中国文史資料集粹」データベース

中国近現代史の研究に関わったことがあれば、一度は「文史資料」の名前を聞いたことがあるだろう。「文史資料」は、概ね清末から中華人民共和国成立直後までの様々な事件に関わった人々による回想録・口述筆記などを集めた編纂物である。「文史資料」は1959年に周恩来の指示によって中国人民政治協商会議の傘下に文史資料研究委員会（のち文史資料委員会）が置かれたことに始まり、その後は省・市・県・区など各行政区のレベルの政治協商委員会にも担当部局が設置され、資料の編集が続いている。周恩来の指示から60年以上が経過した現在では、人民共和国時代の事柄も対象となっている。

改めて言うまでもなく「文史資料」は、いわゆる大文字の歴史では掬いきれない事象の宝庫である。筆者はかつて袁克定（袁世凱の長子）が、世論が袁世凱の皇帝即位に賛意を示している、ということ袁世凱に示すために偽の『順天時報』を作成した、という挿話の出所について調べたことがあるが、これは『文史資料選輯』第74輯所載の袁静雪（袁世凱の娘）の回想「我的父親袁世凱」に同様の話が確認できた。

むろん後年の回想や口述であるから、内容をそのまま鵜呑みには出来ない。そもそも「文史資料」が中国共産党の統一戦線工作の役割を担っていることを考えれば、とりわけ評価に関する部分には注意が必要である。だが、そうした史料に対する姿勢は、基本的には他の史料を扱う場合にも同様であるべきだ。また当人が人民共和国になってこうした回想・口述を残した、ということ自体は事実である点はもう少し注目されてもよい。例えば、日中戦争時代の対日協力者に関心を持っている筆者にとって、「文史資料」の中に占領地政権に奉職した人々の回想が散見される点は大変興味深い。「文史資料」の利用価値は依然高いのである。

ただ「文史資料」の多くは「内部発行」で、その入手・閲覧は容易ではなかった。1980年代から90年代にかけて中国に留学した近現代史研究者にとって、書店を覗いて幸運にも「文史資料」があればとりあえず買って置く、ということは「常識」に属したはずである。筆者もそうした先輩研究者の話を何度も耳にしたことがあるし、自身も留学中（2005～07年）はインターネット古書店の「孔夫子」を利用して、地方や区レベルの「文史資料」を集めた口である。

しかしこうした話は、今や本当の意味で「昔話」になりつつある。超星会社の「中国文史資料集粹」は、中国各地の「文史資料」2万余輯を整理、電子化したもので、本文のキーワード検索が可能になっている。ちなみに筆者が留学中に少なくない資金を投入して集めた各地の「文史資料」は全てが本データベースに収められていた。

東洋文庫は本データベースを購入しているので、機会があれば是非任意のキーワードで検索してみてほしい。きっと新たな発見がある筈である。なお「文史資料」については上田貴子「文史資料についての覚書」（『近現代東北アジア地域史研究会 NEWSLETTER』第15号，2003年12月）が、また「中国文史資料集粹」の利用については大澤肇「中国文史資料集粹」データベースを利用して」（『東方』第445号，2018年3月）が簡にして要を得ており、学ぶところが多い。併せて参照されるとよいだろう。

（関 智英）